2021/12/26
ヨハネの手紙第一　講解メッセージ⑤
『罪について』Ⅰヨハネ 2:15-17

■人はなぜ罪を犯してしまうのか

> 「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」（Ⅰヨハネ 2:15-16）

「世にあるもの」とは、欲のことです。罪を犯す時、そこに至る前には欲がはらんでいます。その欲はこの世から出たもの、つまり、罪の原因はこの世から出ているのであって、神から出たものではないのはもちろんのこと、あなたの内側から出たものでもないと聖書は教えています。

> 「だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。」（ヤコブ 1:13-16）

私たちは欲に誘惑されて罪に至るわけですが、その欲はこの世から出たものです。

この世とは、神と分断されたすべて朽ち果てる世界です。聖書はこれを「死の世界」と呼びます。科学的な言い方をすると「有限性」です。有限性になったがゆえに欲が生じるようになったと聖書は教えているのです。

私たちは神と分断されたことによって神が見えなくなり、神に愛されていることが認識できなくなりました。その結果生まれた不安を払拭するため、人は見える安心を求めるようになりました。

その中で人が最も求めるのは人からの評判です。私たちは子どもの時から、ほめられたり愛されたりすることを求めて生きています。次はお金です。お金はあればあるほど安心です。イエス様はこの二つを、「世の心づかいと富の惑わし」と呼び、これが神の御言葉をふさぐと言われました。

つまり、嘘をついたり、嫉妬したり、怒ったりという悪い行為はすべて、見える安心を求める過程で生まれたということです。つまり、私たちが罪を犯す原因は「死」にあるのです。もともと神が造った世界には死はありませんでした。死は、悪魔が蛇を使ってアダムとエバを欺いたことによって、途中から入り込んできたものです。その結果、人は罪を犯すようになったのです。

■原罪論は正しいのか

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪がこの世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人に死が広がった。その結果、全ての人が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12　私訳）

これが、原文に忠実な訳です。アダムによって死が入り、これによって全世界に罪が広がり、その結果、すべての人が罪を犯すようになったということです。つまり、私たちが罪を犯す原因は、入り込んできた死にあるということです。

従来の訳は、「全ての人に死が広がった。それは全ての人が罪を犯したからです。」（新共同訳）となっています。それは、私たちの中に死の世界が広がったのは、私たちもアダムにあって罪を犯したからという理解に基づいています。これを原罪論と言います。私たちはアダムの子孫なので、アダムが罪を犯した時に私たちもそこにいたのだ、だからアダムの罪を犯す性質を引き継ぎ、そのために私たちは罪を犯すようになったのだ――、これが原罪論の論理です。

しかし、この訳し方に、昔から多くの学者が疑問を抱いてきました。そして、ついにフィッツマイヤーという人が、文献を詳細に調べた結果、文法上このような訳し方をすることはないという論文を発表しました。この人は新約聖書学会の会長を務めた人でもあります。

この訳の問題は、エピ（英語の on にあたる）とホー（同じく that）をどう訳すのかという点にあります。これまでは、理由を表す接続詞（英語の because）、あるいはそれと同意の熟語だと考えられていて、「すべての人に死が入り込んだ。なぜならすべての人が罪を犯したからだ。」という訳が採択されてきました。

しかし、この訳に疑問を抱いたフィッツマイヤーは、なんと当時のギリシャ語の文献を片っ端から調べ上げ、「エピ ホー」が熟語として使われているところを探し出して、それが「なぜなら」と訳せるかどうかを検証したのです。その結果、ほぼすべての文献において「エピ ホー」を「なぜなら」と訳すと意味が通じなくなってしまう、「その結果」と訳すべきであるという結論に達したのです。現在、最新のギリシャ語辞書には彼の功績が記され、「エピ ホー」は「結果を表す接続詞」という事例が記されるようになりました。

なぜこのことが重要なのかというと、これによって罪の原因の理解がまったく変わってしまうからです。私たちが罪を犯してしまうのは、私たちの中に原因があるのではなく、入り込んだ死に原因があると聖書は初めから教えているのです。

■罪は死によって生じた

「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」
（ローマ 5:21）

「死によって罪が私たちを支配した」とあります。これはローマ 5:12 の要約です。罪の原因は、悪魔に欺かれて入り込んだ死にあるのであって、人間の中にあったわけではないことが、聖書では繰り返し述べられているのです。死が入ったことによって罪が住み着き、それが私たちに苦しみや不安をもたらしているのです。パウロはこの苦しみを次のように書きつづっています。

> 「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。」（ローマ 7:15-17）

聖書は聖書のことばによって理解することが基本です。それがルター以来プロテスタント教会の変わらない姿勢です。その聖書が、罪の原因は私たちの中にあるのではなく、後から入り込んだ死だと教えているのです。つまり、罪とは健康な人間を苦しめる病気です。神は健康な人間をお造りになりましたが、死というウィルスによって、人は罪という病気を抱えてしいました。感染症にかかるのは、その人が悪いからではありません。

今私たちは、悪魔に欺かれて死が入ったことが原因で罪に苦しんでいます。だから神は私たちの罪を赦しいやそうとしてくださるのです。神が私たちを弁護し、赦し、責めないのは、私たちが病人だからです。神があなたを愛するのには理由があるのです。

人は、死が入り込んだことによって神が認識できなくなり、死の世界で不安に苦しみ、その苦しみから逃げようとして様々な欲をはらむようになり、さらにその結果、自分の罪の行為を見て罪責感にも苦しむようになりました。神はこれを何とかしようとして、この地上に来られたのです。これが福音の本質です。神にとって人間は救いの対象、癒しの対象であって、裁きの対象ではないのです。

あなたは神の目に高価で尊い存在です。神にとってあなたは病人であり、癒しの対象です。イエス様ははっきりと「病人に必要なのは医者である。私は罪人を招くために来た。」と言われました。「救い」のギリシャ語「ソーゾー」は、もともと「いやす」という意味です。イエス様が私たちを救うために来たとは、いやすために来たということです。

聖書の中に「神のさばきの座」という表現がありますが、神のさばきはすべて「あなたは死に値しない」という判決です。神が死をもってさばく相手、すなわち神が滅ぼすのは、この世を支配する死であり、死をもたらした悪魔です。人間は神にとってさばきの対象ではなく、どこまでいっても救いの対象であり、いやしの対象です。

■聖霊が教える私たちの誤りとは

> 「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」
>
> （ヨハネ 16:8-11）

私たちは、罪についても、義についても、さばきについても、間違った理解をしています。そこで、聖霊様がその間違いを訂正してくださるのです。

1.「罪について」

罪というと、私たちは何か悪い行為を想像します。しかし、聖書は「罪」と「罪の行為」は別物であり、行為の前に「罪」があると教えます。ギリシャ語では、「罪の行為」は複数形、「罪」は単数形で表すように区別されています。

聖書が教える「罪」とは、「キリストを信じないこと」です。信じられないのは私たちが死によって神と分断されているからです。分断されているがゆえに信じられず、それゆえに私たちは不安を覚えて見える安心をむさぼり、さまざまな欲をはらみ、悪い行為をしてしまうのです。

2.「義について」

「義」とは、「私たちが正しいとされること」です。この世界では、「何をしたか」が問われ、それによって正しいか正しくないかの判断がなされます。そのため、神に対しても同じように考えてしまい、多くの人が神の前に良い行いを積めば神が正しい人間と認めて救ってくれると思っています。しかし、イエス様はこれを否定します。神が正しいとするのは「わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」です。つまり、「イエス様が見えなくなることがあなたの義になる」ということになります。

それは、神が見えなければ、私たちは神の前に良い行いをして見せることができないからです。自力で神のもとに行く手段がなければ、ただ神様に引き上げてもらうしかありません。つまり、信じるしかないというという信仰による義のことなのです。

神様は私たちに救いのボートを用意し、「誰でも乗りなさい」と御手を差し伸べておられます。その手をつかむ者を、誰であっても神様は引き上げ、救ってくださいます。これが信仰の義です。行いの義ではありません。

神は行いによって人を救うのではなく、誰でも救うのです。私たちの側はそれを受け取るだけです。「受け取ること」が「信じる」＝「信仰」です。信じればよいだけということは、神は誰であっても義としてくださるということです。

３.「裁きについて」

神にとって裁きの対象は、死の世界であるこの世を支配する悪魔です。人間ではありません。ですからイエス様はこう述べておられます。

> 「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」（ヨハネ 12:47）

あなたはさばきの対象ではなく癒しの対象なので、自分の罪を隠す必要はないのです。自分を隠そうとして暗やみの中を歩むのではなく、光の中を歩みなさいと神様は言われます。暗やみとは、「私は立派な人間です」と、行いによる義を主張する生き方です。光の中を歩むとは、自分の罪を正直に認めて、神にいやしてもらう生き方です。

ヨハネの手紙第一は、あなたの罪はあなたが原因ではないことを明確にし、だから罪を隠す必要はないと教え、むしろ言い表すことで神が弁護しいやしてくださることを教えています。もし「自分は罪を犯してない」と言うなら、その人は神を偽り者とします。神はあなたの罪を知り、あなたが死という病原体に感染して苦しんでいるとわかっておられます。でも大丈夫です。イエス様はあなたをいやすために十字架に架かり、永遠のいのちを持っていることをあなたに教えるために、よみがえってくださいました。これは、あなたも私と同じように復活するから大丈夫だという命がけのメッセージなのです。

「罪を犯す者は悪魔から出ている」とは、「罪はあなたから出ているわけではない」ということを明らかにするための表現です。私たちを苦しめている罪の原因である死は、悪魔の仕業によるものだからです。

> 「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」（Ｉヨハネ 3:8）

神が来たのは、悪魔のしわざを打ちこわすためであり、あなたを打ちこわすためではありません。むしろ、神はあなたをいやすために来られたのですから、おおいにいやされるべきです。医者の前に症状を言い表すように、人愛せないつらさ、憎むつらさを告白すればよいのです。そうすればイエス様が治療をしてくださいます。ですから、どんどん重荷を神の前に差し出しましょう。これが御心を行うということ、つまり、光の中を歩む生き方です。

> 「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます。」
>
> （Ｉヨハネ 2:16-17）

神にとどまるとは、罪を言い表していやしてもらうことです。

多くの人は罪を犯すのは自分が悪いからだと思い、神の福音は悪い者を良くするものだと勘違いしています。しかし神は、私たちは良きものだと言っておられます。それが死によって苦しんでいるので、神はその死を排除してくださるのです。

神の福音は、悪い者を良い者に変えるのではなく、良いものが良いものであることに気づかせるものです。このことに気づけば、自分をさばくことも人をさばくこともなくなります。さばくのはダメな者だと思っているからです。しかし、人はただ死に苦しんでいるだけであって、悪いものではありません。だから、私たちが第一にすべきことは、自分をダメな者ではなく良きものであると受け入れることです。こうして愛を受け取ると、まわりを愛せるようになっていきます。

神はあなたを良きものとして造ったのであって、ダメな者に見えるのは、死が原因です。このことにしっかりと立って、自分をさばくことも人をさばくこともやめましょう。そうして神の愛の中でいやされていき、愛を持って互いに愛することを目指しましょう。